
また、あえたね

鮎坂カズヤ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

また、あえたね

【Nコード】

N7350B

【作者名】

鮎坂カズヤ

【あらすじ】

臆病で、甘えん坊で、とても小さな子犬が起こした、小さな奇跡の物語。

また、あえたね

また、あえたね

どこ？

おかあさん、どこ？

ボク、どうなったの？

ボク、おかあさんをまもれた？

おかあさん おかあさん

きがつくとまっしろなところでした。

まっしろなかべ。

まっしろなじめん。

まっしろなそら。
そんなまっしろなところにいた。

「あっ、生き返った！」

こえがきこえた。

ニンゲンがうえからボクをみていた。

おどろいた。こわい。こわい。

ニンははいしをなげたりおいかけてきたりするんだ。

だから『いかく』しなきゃ。

おかあさんがいつてた。ニンゲンがちかくにきたらおおきなこえをだしなさいって。

それを『いかく』っていうんだって。

「ウーッ！ アン！ アン！」

「かわいー、一生懸命吠えてる　でもまだ暴れちゃダメだよ。もうちょっとだけ横になってようね」

おおきなこえをだしてもこわがらないよ。

だめだ、たべられちゃう。

ニンゲンにつかまるとたべられちゃうんだ。

あたまからガブツてたべられちゃうんだ。

いやだ、たべられたくない。

「ウー！ アンアンアン！」

ガブツ！

また、あえたね

「あいたっ、噛まれた〜！　もー、あたまきた！　お前なんてこつだ！」

ポフッ！

あたまのうえになにかふわふわなものがおちてきた。

たべられちゃったんだ！

ボク、たべられちゃった。

……かなしい。ボク、しんじやった。

「クーン、クーン」

「よし、おとなしくなった。そのままちゃんとおねんねしててね」

「クーン、クーン」

……からだがおもつようにうごかない。

これがしんじやうってことなんだ。

なんだかあしがいつぱいいたいよ。

なんでいたいのかな？

おかあさんはどこいったの？

おかあさんになめてもらったらいたいのなくなるのに。

おかあさん、どこいっちゃったの……？

「クーン……」

おかあさん、もしかしてあのときたべられちゃったの？

ボク、おかあさんをまもれなかったの？

アイツがおかあさんたべちゃったんだ。……かなしい。

あいたい……、おかあさんにあいたい……。

「……………」

また、あえたね

なんだか……、ねむいよ。
このままねたらおかあさんのとこに行くのかな？
おかあさん

「ほぐら、ミルクだよ！ これ飲んで元気だしてね、おちびちゃん
」

……おかあさん？ ちがう、さっきのニンゲンだ！
いやだ、こわい。こわい。

「ほぐら、これくわえて！ まだ母乳は出ないから粉ミルクだけど、
とくっても栄養あるんだよ！ ほら、飲んで飲んで」

……？ なんだかいいにおいがする。
おかあさんのおっぱいのおいがする。
めのまえにあるものをそっとなめてみる。

おいしい！ おかあさんのあじがする！
おかあさん、このなかにいるの？ おいしい……おいしい……

「ふふ、夢中になって飲んでる。……か〜わい〜 竜ちゃん仕事
から帰ってきたら、この口見てびっくりしちゃうかな？」

また、あえたね

「マイ……、こいつどうしたんだ？」

「わたしが産んだの」

「えっ！？ ……んなわけないじゃん。妊婦がそんなギャグ言うなよな」

「ほら、こんなになついでる。きつとわたしのことお母さんだと思ってるんだよ」

「指先噛まれてるだけじゃん」

カプカプ。……おいしい。

なんだかやわらかくて、かんでてきもちいい。

ニンゲンだとおもってたけど、このヒトつてもしかしてたべものだったのかな？

「このコまだ歯がとがってないからカプカプされるの気持ちいいんだよ。あとで竜ちゃんにも噛ませてもらおうね」

「いや、それはいいんだけど。そいつどうすんだ？ うちで飼う気か？」

「もちろん！ このコとわたしは出会った運命だったんだよ！ さっき産婦人科に行く途中で血まみれのこのコが寄りかかってきたの！ 急いで病院で治療してもらってなんとか動けるようになったんだよ！ それを竜ちゃんは放り出そうとするの！？ 鬼ー！！ 鬼畜ー！！！！」

「鬼畜つてなんだよ！？ て言うか、さすがにそんなことしないつて。まあ、ケガが治るまではおいてもいいけど……」

「ケガが治ったあとは放り出すの！？ 鬼ー！！ 鬼畜ー！！ ドスケベー！！！！」

また、あえたね

「あー！ もうわかったから落ち着けよ！ そいつはうちで飼つよ、飼わせてください！」

「やった！ やっぱり竜ちゃんやさし〜！ 愛してるよ〜竜ちゃん」

「わー！ 飛び回るな！ おなかの子に障るだろ！ 落ち着けー！」

「アン！ アン！」

このふたりはじゃれあつてるのかな？
ボクもいつしよにはねる。

いたい。

あしがいたいのをすれてた。
でもたのしい。
なんだかいつぱいたのしい。

「ほら〜、チビ〜おいで〜」

「アン、アン！」

おいしいヒトがボクをよんでる。

またおかあさんのおっぱいくれるんだ。

まだあしがすこしいたいけど、がんばってはしる。

「はい、よくくれました〜」

「ごほうびのミルクだよ〜」

また、あえたね

おいしい、おいしい。

「このヒトもおいしいけど、やっぱりこのしろいもののほうがおいしい。」

「竜ちゃんもあげてみる？ もうすぐお父さんになるんだから練習しなきゃ！」

「そうだな。よし、やってみるか。ほら、チビおいでー」

しろいものが大きいヒトにとられた。あるくのいたいけど、がんばる。

「……なんか、こうよたよたとこっちに歩いて来るのを見るとやばいな。思わず抱きしめたくなくなっちゃう」

「でしょ！ 竜ちゃんもすっかりこのコのトリコだね」

「……子供ってこんな感じなんだろうな。危なっかしくて、ほっとけなくて。いくら世話が大変でもそれを苦に感じさせないくらい愛らしくて……。守ってあげたいって、心の底から思えるんだろうな」

まるでツルツルしてて、うまくかめない。

かまないとおいしいのでないから、ちゃんとかまないと。

「ははっ、ほらここだよ。ちゃんとくわえろって」

「竜ちゃん、なんだかすごく優しい目してる」

「えっ、そうか？」

「うん。竜ちゃんのこんなに優しい目、久しぶりに見たかも。初めてHした時以来かな？」

「……お前、そういうこと誰かがいる前とかで絶対言つなよな」

「言っちゃダメだった？ ごめんね」

「……へー、言っちゃったのか。そうなのか」

「竜ちゃん、だんだん目が怖くなってるよ。ほら、チビにちゃんと

ミルクあげないと」

おなかいっぱい。もうたべられない。

おいしいヒトのところまであるく。

このヒトもいいにおいがするんだ。

すこしだけ、おかあさんとおなじにおいがするんだ。

カプカプ

「……やっぱり嘔まれるんだな」

「すっかり足も治ったね、チビ。逆にわたしはあまり動けなくなっちゃった」

「しょうがないさ。結構おなかも大きくなってきたしな。もういつ産まれてもおかしくないんだろ？」

「一応予定日は二週間後なんだけど、早ければそろそろ産まれるかもって言うってたよ」

おいしいヒトはあまり前みたいにはねなくなった。

つまらない。

いっしょにはねるの楽しかったのに。

どうしたんだろっ？

また、あえたね

「じゃあ、仕事いってくる。何かあったらすぐに俺に連絡しろよ！」

「竜ちゃんは心配性だな。大丈夫、携帯ずっとポケットに入れとくから、何かあってもすぐかけられるよ」
「チビ、マイに何かあつたらちゃんと守れよ。お前だけが頼りだからな」

「アン！」

大きいヒトがボクを見てなにかいってる。

あそんでくれるのかな？ やった、やった。

あれ？

しっぽをふってるのに大きいヒトは行っちゃった。

いつもあさはどこかに行っちゃう。

どこに行くんだらう？ ボクもいっぱい外にでたいのに。

「竜ちゃんいつちゃったね。仕事とわたしのどっちが大切なのかな？」

「もちろんわたしだよ、ねえチビ」

「アン！ アン！」

足、もういたくないよ。

おもいつきはしりたい。

外にでたい。外にでたい。

「アン、アン、アン！」

「ん？ そんなに吠えてどうしたのチビ？ おなかすいたの？」

ちよっと待っててね。すぐミルクつくるから。……よいしょ」

おいしいヒトがゆっくり立ち上がる。

やった、外にでれるんだ！

おもいつきはしれるんだ！

どこから外にでるんだっけ？

大きいヒトが外にでたところまではしる。

また、あえたね

でも戸がしまつててでれない。

……かなしい。

「クーン」

「あれ、チビ？ 玄関前に座つちやつてる。散歩に行きたいの？」

今日は夕方に病院に行く予定だからその時まで待つてね」

「クーン」

かなしい。

ここにくる前はいつだつてじゆうにはしりまわれたのに。

はやくそとにでたい。

いっぱいでたい。

「あつ、もうこんな時間だ。検診いかなくちや。ほら、チビ
くお外行こうね」

おいしいヒトがそとにだしてくれた。

うれしい。だけど、あまりじゆうにうごけない。

ひもでつながれてておもいきりはしれない。

でもうれしい。うれしい。

また、あえたね

「あん、そんなに強く引つ張らないでよ。わたし結構動くのしんどいんだからね」

うれしい。うれしい。そとの匂いだ。うれしい。

「ふふ、チビうれしそうだね。そんなにしっぽ振っちゃって。でも急がないと暗くなっちゃうから、早く行こうね」

うれしい。うれしい。

もっとおもいきりはしりたい。

でも、おもいきり動こうとするとおいしいヒトがじゃまするんだ。あっちに行きたいのに、なんでこっちにつれて行くの？

じゆうにうごきたい……。

あっちにいきたい……！

グンッ！

「あっ！ チビ、だめー！」

ひもがはずれた！

じゆうだ。じゆうにうごける。うれしい。

おいしいヒトがうしろからおってくる。

つかまったらじゆうじゃなくなっちゃう。

「チビーッ……！」

うれしい。うれしい。じゆうだ。

おもいきりはしれる。うれしい。

外の匂いがつよくなる。

ボクのすきな匂い。

おかあさんといっしょにいたときの匂い。

木の匂いがした。

これもすきな匂い。

また、あえたね

久しぶりに草木に体をこすりつける。
気持ちいい。
気持ちいい。

「はあ、はあ……。チ、ビ……」

おいしいヒトがふらふらしながらこっちにやってきた。
なんだかいつもよりゆっくり動いてる。どうしたんだろう？

「アン！」

「はあ、はあ……。よかった、急に走るんだもん……。はあ、あ

」

どせつ。

あれ？ おいしいヒトがねちゃった。

気持ちいいのかな？

ボクも同じようにねてみる。

気持ちいい。

気持ちいい。

「はあ、はあ……。おなか、いたい……。ちょっと、だめ、かも……」

おいしいヒトは気持ちよくないのかな？

なんだかいつぱい苦しそう。

どうしたのかな？

わからない。

こんなに気持ちいいのに。

どうしたのかな？

また、あえたね

「グルルル……」

うしろからこわい声がきこえた。

この声、どこかで聞いたことがあるよ。

……そうだ、前にボクとおかあさんをたべようとしたアイツだ！

おかあさんをたべたアイツだ！

こわい、こわい……。

「はあ……、はあ……、怖い犬、きちやった……。竜、ちゃん……」
「グルルル……」

アイツがちかよってくる。

ボクたちをたべようとしてるんだ。

こわい。こわい。

でも、まもらなきゃ。

このヒトをまもらなきゃ！

「ウー！ アン！ アン！」

「グルル……」

「はあ、はあ……、チビ……」

きた！ こわい、こわい！

でも、今度こそまもらなきゃ！

まもらなきゃ！

ガブツ！……！

「キャーン！」

また、あえたね

かまれた！ いたい！
いっばいいたい！
でもまもらなきゃ、まもらなきゃ……！

「アン！ アン！」

ガブツ！

力いっばいかんだのに、アイツはへっちらな顔してる。
これじゃだめなんだ。

もっと力をいれてかまなきゃ。もっと力を、

ブンツ……！！

「キャン……！」

いたい！ ふりまわされた！

足が、背中が、いっばいいたい！ いたい！

でも……、負けない！

こんどこそおかあさんをまもるんだ！

あれ？ まもるのはおかあさんだっけ？

とにかく、まもるんだ！

「アン！ アン！」

「ウォン！」

「キャーーン！」

いたい！ いたい！

でも……、まもらなくちゃ。

まもらなきゃ……、まもらなきゃ……。

また、あえたね

「やめて!! チビをいじめないで!!」

おかあさんの声でアイツはおどろいてる。
今だ、今度こそ……!!

ガブツ!!

やった!

首におもいきりかみついてやったぞ!
どうだ、まいったか!

「グルル……、ワオン!」

「キャン!!」

ひっかかれた!

いたい、いたい! いっぱいいたい!

でも……、まもらなきゃ……、
守らなきゃ

「チビ! ……これ以上チビを傷つけたら、許さないから!!」

お母さんの叫び声。

お母さんの気迫にアイツは怖がってるみたいだ。
少しづつ後ろに下がっていく。

今だ。

「ワオン!!!!」

また、あえたね

怖がってるアイツに思い切り吠えてやった。

ボクの声に驚いて、アイツは逃げていった。
アイツの匂いが消えた。
本当にいなくなつたんだ。
やった、お母さんを守れた。
今度こそ、守れたんだ。
良かった……、良かった……。

「うう、チビ……。こんなに、ケガして……。わたしのこと、守ってくれたんだよね？　ありがとう、ホントにありがとう……」

お母さんに強く抱きしめられた。

……あれ？　泣いてるの、お母さん？

泣かないで、お母さん。

ペロッ

お母さんが泣き止むようになめてあげる。

お母さん、泣かないで。

でもどんなになめても、いっぱいなめても、お母さんは泣き止まない。
それになんだか苦しそう。

どうしたんだろう？

もうアイツはいなくなつたのに。

お母さん、どこか痛いのか？

「うう……。おなか、痛いよ……。竜、ちゃん……」

プルルル、プルルル

お母さんの体から変な音が聞こえる。

また、あえたね

なんの音だろう？

『もしもし？ ……もしもし？ もしかして、マイか？』

「竜ちゃん……、痛いよう……、生まれ、そう。たす、けて……」

『おい、もしもし！ 今どこにいんだよ！？ 答えられるか、マイ！？』

「……山の、入り口近くの、ううっ、……大きな木が、あるところ……」

『それだけじゃわかんねえよ！ もしもし、マイ！ マイ！』

「……はあ、はあ……」

『聞いているかマイ！？ しゃべらなくてもいいから、絶対電話切んなよ！』

お母さんが持つてるものから大きなヒトの声が聞こえる。

あのヒトならお母さんを助けられるかもしれない。

あのヒトを連れてくるんだ！

「ワン！ ワン！」

お母さん、待ってて！

すぐにあのヒトを連れてくるから！

すぐに戻ってくるから！

ダッ！！

痛い！

足が、首が、体中が痛い！

でも走らなきゃ、走らなきゃ！

お母さんを守るんだ！

また、あえたね

おうちまで戻ってきた。なのにあのヒトはどこにもいない！
どこにいるんだろう？

お母さんは苦しんでるって言うのに、一体どこにいったの！？

「ワン！ ワン！」

どこにいるの？

早く、早くあのヒトを連れていかなくちゃ！

大きいヒトがいつも向かう方向に走る。

足がふらついてうまく走れない。

どうしてうまく走れないの？

速く走りたいのに。

早く大きいヒトを見つけないきゃいけないのに。

どうしてうまく走れないの？

もう 走れなくなってもいいから

もう 勝手に先に走ってったりしないから

もう 一緒にはねること できなくてもいいから

もう 白いモノもいららないから

また、あえたね

お母さんを助けられたら もうなんにもいらないから

お願いだから あのヒトを見つけさせてください

お願いだから

お願いだから

「チビ!」

あのヒトの音がする

よかった やつと見つけた

「チビ! マイは!?! あいつはどこだ!?!」

このヒトを連れて行かなくちゃ

お母さんのいるところまで 連れていかなくちゃ

「チ、チビ! どこに行くんだよ!?! マイのいるところか!?!」

あれ もう痛みを 感じない

ずっと走ってるのに 苦しくもない

前しか見えない

お母さんの いる ところへ 続く 道しか 見えない

お母さんの こと 以外 何も 考えられない

どうしたのかな

ボク どうしたのかな

また、あえたね

でも いいや
早く 早く
このヒトを 連れて いかなくちゃ
連れて いか な く ちゃ

「 マイっ!!!」

「……竜、ちや、ん……」

「くそっ、破水してる……! すぐ救急車呼ぶからな! もう大丈夫だからな、マイ!」

やっと やっと ついた

これで お母さんは 助かるの かな

お母さん また 元気に 跳ねること できるの かな

大きいヒトが お母さんを 助けて くれるよね

何だか とっても疲れた

何も 感じないよ

何も 見え な い よ

また、あえたね

何も考えられな

また、あえたね

きがつくとまっしろなところにいた

まっしろなかべ

まっしろなじめん

まっしろなぞら

そんなまっしろなところにいた

ちかくにだれかがいる

……おかあさん？

おかあさんなの？

みえないけど かんじる

やわらかくて いいにおいがする

おかあさんだ！

また、あえたね

おかあさん たすかったの？
ボク おかあさんをまもれたの？
ボク おかあさんをたすけられたの？

よかった

おかあさん

おかあさん

あいたかった

あいたかった

「おぎゃー、おぎゃー！」

「がんばりましたね、奥さん。一時は本当に危なかったけど、無事に産まれましたよ。とっても元気な男の子です」

「本当に？ 看護婦さん、わたしにも抱かせて……」

「マイ、マイ……！ よくがんばったな」

「竜ちゃん、産まれたよ、わたしたちの赤ちゃん」

「ああ、そうだな。……チビは残念だったけど、この子だけでも無事に産まれてくれて、本当によかった」
「……この子が産まれたのは、あのコのおかげだよ。あのコがわたしとこの子を守ってくれたんだよ。……とっても勇気のあるコだった」

「……ああ、そうだな」

「おぎゃー！ おぎゃー！」

「おー、よしよし。元気な子」

「おぎゃー！ おぎゃー！」

「……あなたにはお兄ちゃんがいたんだよ。とっても怖がりで、とっても甘えん坊で、でもとっても勇敢なお兄ちゃん。そのコの名前はね」

おかあさん

おかあさん

また、あえたね

また、あえたね

また、あえたね

また、あえたね

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7350b/>

また、あえたね

2009年7月3日19時01分発行